Part 5

世界遺産・富士山に向けて
―求められている土木工学から風土工学への回帰―

竹林 征三　フェロー会員　富士常葉大学 名誉教授、山口大学時間学研究所 客員教授

富士山と世界遺産

日本にはこれまで16個所が世界遺産に登録されている。

しかし、富士山はなぜか登録されなかった。他の地域はどんどん現役で合格していくのに、富士山は何浪もしてもいつまでたっても合格の兆しは見られなかった。

世界遺産に指定された他の地と比較して、それらより富士山の自然的価値、文化的価値は劣っているとは考えられない。世界遺産の指定を審議する先生方には日本の最大・至高の富士山の価値があまりにも大きく深いので、理解できないのかも知れない。「猫に小判」、「豚に真珠」という。理解できない者には、価値は評価できない。

何も今さら世界遺産に認定してもらわなくても日本独自で世界遺産を凌ぐ遺産を「別格特別遺産」とでも名付けてユネスコの世界遺産など歯牙にもかけず、相手にしなかったら良い、その方が富士山のプライドは傷付けられずに済む。

以上が富士山の麓野で10数年富士山のことを思いめぐらしてきた者の本音である。

しかし、昨今、静岡・山梨両県を挙げて、これまで以上に世界遺産の指定に熱を上げている。本音は本音として、せっかく富士山の価値を高く評価したいとの運動なので、それに水をさすことは、富士山をこよなく愛する者として、本意ではない。

富士山の価値

富士山にはきわめて高く深い自然的価値と文化的価値がある。その原点は富士山の類まれなるその美しい姿形から生まれてきたと考えられる。実は名は体を表すという。その美しい姿形に「ふじ」という名前をつけたことにより、富士山の価値は数十、数百倍大きくなったのである。「ふじ」に富士だけではなく不二、不死、不尽、福慈、等々の価値が新しく付け加わった。

その名前の価値を一番深く知るものは徳川家康ではなかったか。家康は夢の全国統一を果たし、最後にこだわったのが、富士山が見える地での大往生であった。富士見は不死身に通じる。夢の夢なのである。

富士は日本の精神風土の象徴であり、風土は不二である

富士と風土とは切っても切れない関係にある。風土は富士にあり、風土不二なのである。

十人十色の人びとが街街(まちまち)で展開してつくり、つくられてくるのが風土である。街街は人びとが集まってつくる空間的構造であり、多様そのものである。その代表的なものが「お江戸」であった。お江戸八百八町は街街の多様性を表現する象徴的な言葉である。街街の多様性のスケールとしては百の単位がふさわしい。したがって百町百色である。十人十色の人びとが百町百色の街街でつくり、つくられる風土は、十と百の組み合わせだけの多様性がある。風土は十と百の掛け算の多様性がある。したがって千風土千色である。表現を変えれば風土不二である。不二は富士に通ずる。

富士山はわが日本人の精神的風土の象徴である。富士山は駿河と甲斐の二国の境界の高峰であるが、「ふじ」の名前は日本人が居を構えたところ、北は北海道から南は鹿児島・沖縄まで実に三百座以上の○○富士と称される「ふるさと富士」をつくって来た。それだけに止まらず、日本人が何らかの形で足跡を残してきたところ、千島列島から南洋の島々にも見立て富士をつくってきた。それらの多くの見立て富士はあるも、同じものはない不二なのである。その根源は当然不二の本山・富士山なのである。

世界遺産登録の意義と土木の役割

価値観が多様化し、グローバル化の大

世界遺産登録への取組みが進む富士山 —土木とのかかわりを考える—

波が襲ってきて、日本人のアイデンティティが徐々に忘れられかけてきている現在、富士山の世界遺産登録の意義は、日本国民全員に日本のアイデンティティを再確認させていただく機会をつくってくれることである。

これまでの先例の世界遺産は日本のどこか一部の地域の指定であった。富士山は駿河と甲斐の県境の一個所の地域の指定であっても日本全国に意義は広まる。日本のアイデンティティ、日本のシンボルの指定である。その意味する内容は別次元のスケールである。

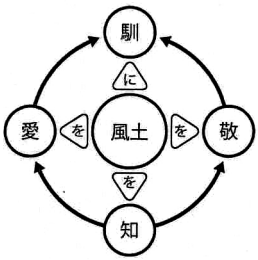
従来の土木は日本人のための、日本人による、日本の国土づくりの実学であった。

これからの土木は国土づくりではなく、日本の風土づくりの実学と位置付けなければならない。国土とは日本の国を構成している山川、海洋等の地圏、水圏等の形あるもののイメージとなる。私は土木の対象とするものは国土ととらえず、風土ととらえるべきであると訴え、そのための具体的な手法として構築したのが風土工学である。経済効率追求を評価関数とする利便安全国土づくりの従来の土木の手法は多くの弊害に直面している。これからの土木はより良好風土形成を目的関数とする風土工学へさらに大きく脱皮することが求められている。土木の原点・築土構木は心安らぐ豊かな地域づくりである。

世界遺産登録を契機として経済的な地域活性化を目指す社会資本整備ではなく、日本のアイデンティティ覚醒と良好な風土形成を目指す社会資本整備が求められている。

具体的には富士山の世界遺産への利便性の経済効率追求のためのアクセスの、道路整備等ではなく、富士山の誇りうる風土形成の種を育む道路整備である。富士山の誇りの再構築は日本の誇りの再構築につながる。世界遺産・富士山に向けて、求められている土木の役割は、従来の土木工学から本来の土木・風土工学への回帰なのである。

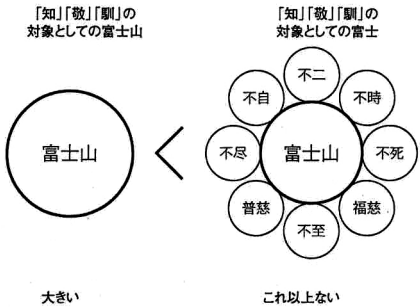
風土工学・「知」「敬」「馴」の三相



「風土」をより深く「知」るほど、風土を「愛」することになり、風土を「敬」うことになる。風土を知り、愛し、敬えば風土に素直に「馴」染むことになる。これが誇りうる風土形成プロセスである。

図1　「知」「敬」「馴」の三相

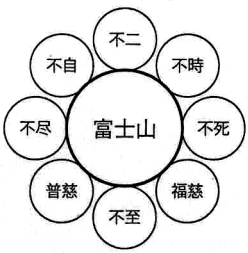
「知」「敬」「馴」の富士



知・敬・馴の対象として富士山の価値は大きい。さらに、知・敬・馴の対象としての「富士の価値」は「富士山の価値」より比較にならないほど大きい。

図2　富士と富士山の概念の大きさ

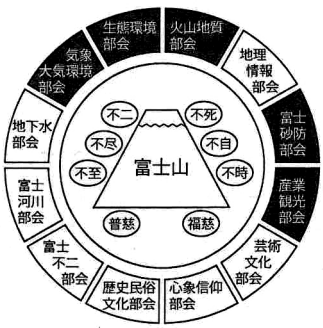
富士曼荼羅



富士の概念

富士山を中核とするも、それらに「不二」、「不時」、「不死」、「福慈」、「不至」、「普慈」、「不尽」、「不自」の価値が付加された「富士」の概念は更に大きい。これを「富士曼陀羅」という。

図3　富士の概念は富士曼陀羅



富士学会の十二の研究部会

図4　富士の研究は文理融合の十二部会